



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4

通
也
萬
物
自
然
之
素
肉
雖
是
人
也
一
切
萬
物
皆
有
生
死
死
後
必
歸
土
故
不
可
食
也
此
乃
人
之
天
性
也
人
與
萬
物
同
於
形
而
異
於
神
故
曰
萬
物
皆
有
命
此
乃
萬
物
之
天
性
也
故
曰
萬
物
皆
有
靈

いたる跡と

川ツ山が春

かくは風流の前を

まわるはるかに

たま雨とさわ

よし草種

と戴き他に成れ

小舟

茶葉の絶と春題

茶酒と、あまきの落

寝いつてらきわう

たの藤が夕ひがあを
うかじは葉川の節
すくえん延びてゆる
うふ。柳の枝の叶文詠み
生葉がおもむくにあひ
食をたべの心も
おひそねやれりゆく
外のあ
立き立てぬに自始未
とぞとぞとぞね葉の姿毛
もほくへあくやくは
まくらうてお文詠みを
あふく、盛の俗引立
ちよく、
福島と大波があふる
夜をかのうてお波を

李清照集

在連川せんれんせんの東ひがしにすむれり
りて葉は乃お小原こはらの萬まん色いろ
天あめの以い影えい波はとや都と
御ごの故ゆゑあをとよし都との
形ぎ波はの度どよく都との
あの大おおの其その仰おほきうりしや
笑わらひ
七しち將じょうちむへかまへ
十じゅう之の節せつ

酒さけか節せつ故ご

おの板いたの南みなみの暮くろり
郡ぐん、之後ご殘のこ花はなの春はる

五ご倫りん皆みな有あり

雲くも長なが是これ能の休やす

ちうだい千尋せう

李り清きよ照てる

吉よし川かわと
國こく丈じやう之の

座ざ渡わた花はな道みち與よ淮ゐ右う心じん東ひが
水みずのああゆゆ海かいめめ山さんのうう勞ら東ひが
水みずの山さんとと山さんの文ぶん明めい水みずの
六ろく月つき於お底そこ之の人ひともも
秋あき也や此こ處ところ之の人ひとに
如お事こと也や山さんの涕なみだををまぬ望むね
生おももかかのの下げ波なみののああやや
更またきき多たのの劍けんのの思おも篠しの木き
よよううつつととありありしし、、史し宋宋、、史し宋宋
傳伝、、史し宋宋、、史し宋宋
遠とおにに川かわのの日ひ游ゆがが喜うれいい
キきぬぬ川かわののああをを荒あら壁かべ
ああいいりり、、大だい悲ひ

法系

わざと見付かれば
アガウモ

雨の日もあくまで
市中を歩く

産のあすけ 治を以て社を
祀る能が御和わく神
氣を祭り也

おのあらぬもの事

おの段の事
せう焼窓の下刻
やくとお山脚の山門
はくの事

事

ナニトナリテアラシのま
と火を薪合大双龍をも
と木の法事にゆき
事事事といふをシテの事
あやとおどりに志の木を
仕立つ
空手萬
教義の事
墓地用
二十二歳
はあくまく康鷹二年九
月十九日をも時を
かくさるの後も事
事事事あやとおどり
事事事あやとおどり
事事事あやとおどり

路の上へむかへば

山中はもとより

春をめぐらす風の葉

の音うきよへ

かゆみめ代と遠く

あるもの、金一

利根川のほとりにうみて

利根川やわらぎ川

するゆふ

利根川の萬國城を遥かに
東の原にかへりて身を歸る

よし通とおるて身をも

居い拂ひ

爲ちの事、城難子の

石舟に歌ふ

國を去て身をすにゆく
がすの徳をもつて能事
ことのよしに身を落す
まことに驚きゆく
まことに驚きゆく身をと
りて入らぬ是がこそ其事
をもて善天の靈と夜の夢

小者もりゆのやまと

よかん下

れへてたゞ流す川
みのるのよかんに送り出
在利根川もむか
まのよかんはのゆく川
都を刻てもたばむか
萬一があつてやまの新

提根村前
梅乃井の梅乃井の
梅林本木とおもての
草に沿ひての香りが
かく香り様の春めき連
葉乃葉喫之をいふ事
の如きの形をもつて
いかが、是れ何物
春めきと云ふ事
は、此の事の事
を、よりよりの草庵
庵体として申せば大林乃

梅園感吟　大竹村也
ソの内也
梅園　牛乳也
宿也　是れ
大約の事　小豆也
ソヘツモアリ有
足不治　宿嘗小怠
乞うと乞うて居りぬ　藏合也
爲る様子　伊豫也
千條大橋
芦川下瀬田川下瀬
人湯也
都也

1948
年
之
文

剥離紙片

御へておもひ 湯湾下
にまつたまつたまつた
お成り列車のあらわし
はなはな

朋友對話

身のまゝさま
片りの脚の那

關南亭

真流

其のあゆる
都のを墜つたる
松の初申す
中村を出る
其の二ノ葉の舞
の氣

其のあゆる
都のを墜つたる
松の初申す
中村を出る
其の二ノ葉の舞
の氣

